伊勢物語傍註　下（安永五年版）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

伊勢物語傍注

下

源氏あけまきに在五か物語をかきていもうとにきんをしへたる所の人のむすばんといひけるをみていかゞおぼすらんとのたまふ女宮うらやましくもなき...

○むかし男いもうとのいとをかしげなりけるを見をりて

うら(末)わかみねよげに見ゆる若草を
人のむすばんことをしぞ思ふと
きこえけり返し
初草のなどめづらしき言の葉ぞ
うら(心)なくものを思ひけるかな

○むかし男ありけりうらむる人をうらみて
とりのこ(雞卵)を十づゝ十はかさ(累)ぬとも
おもはぬ人をおもふものかは

第百五十二号
92B 916

やいてとられて 女真名

相思ひきえぬるものとありやべし

あれはこのまとのこころにて 果

ほとゝぎす

時鳥なくそれ桜ちりぬべきもの

あるものゝ難 人のこゝろを

又女うばし

数書 行水よりそゝぐ人もはるの花を

かりしらぬ人ともよりうるを

まゝとゝこ

万葉才一 水上 カスタフトヤ ロヲヤイツ

如数書吾命 ミヒアヒーウケヒ ツワル

妹相受日鶴 タヒ

鴨

行水とそゝぐまひとちる花や

いづまとゝて 待 云 あるまゝきらん

あるゝ互べゝゝゝ 有る男女 ものびあるときし

有る事なるべし

○むゝ男。人のせんざいよ。菊うゑゝる

うたゝうゑで秋なきこゝろやちるぶん

花ゝそちゝ根ちへるまこめや

○むゝ男あるゝ。人の作よりかゝりちまきをこと 粽

せあり有るゝ西事よ

ありやゝり 刈 ありとやすまでほゝひる 迷

我はのにいでゝかる(狩)ぞわびしき

とてきじ(雉)をなんやりける

○むかしをとこ、あひがたき女にあひて、ものがたり(なとイ)

するほどに、とりのなきければ

いかでかはとりのなくらん人しれず

思ふ心はまだよぶかきに

○むかし男、つれなかりける女にいひやりける

ゆきやらぬ夢ぢをたのむたもとには

あまつそらなる露やおきけん

○昔をとこ、おもひかけたる女の、え(得)うまじうなりての世に

おもはずはありもすらめどことの葉の

をりふしごとにたのまるゝかな

○むかしをとこ、ふしておもひ、おきておもひ、思ひあまりて

我袖は草の庵にあらねども

くるれば露のやどり(とまる 真)なりけり

○昔男(真二十三)、人しれぬものおもひ(ある男 真)けり。つれなき人のもとに

恋わびぬあまのかる藻にやどるてふ

われから身をもくだきつるかな

○むかし心つきて色このみなる男、長岡といふ所に

家つくりてをりけり。そこのとなりなりける宮

ぞうよ。ことものき女ども。のかるるうるふぐ田うう
んうて。ひ男のあるとうて。いみじのうきりわ、え
とびやうて。あつまりて入ぎうんぐ。ひ男よびけ巣
よううんようまじ。女
あまてようう恋い〜世の常うまや
ちうう人の言づもせや
やいひ。ひうあつまりきなてきうんぐ。ひ男
むぐういてあまてうあがまうきう
うもうよううぐうう
ここうん出〜ありうひ女ぐ。ほひうんいひうぐ

うちうびておうぼひうてきうあせぐ
我を田づうあうすあと
○むう男。京をいうぐ。おうひうんぐ。ひんぐ山ようあんと
おうひ入て
住うびなううきうや山ぐてイ
かとうううぐ米常まう絶てん
かうてあいあ〜やうて。うういうあううんぐ。おまてうは
ううぎうぐ。いき出て
我ぐうようあうぐ。おうくううあ田の川
門　棹
うううあ舟ういのぼうこの

五

やうなんいひあいきおんなを家

○むかし男ありけり。あづまにすみけるに、心を不忠誠あるものとおもひて、

にくからぬ女の家にしばしば自あるをとこ、人の妻になりぬ。むかしとなりにける宇佐使人のもとにいとねんごろにいひかよひけり。

ある国の守の妻なる人のもとにまかりてをりけるを、女祇兼あるじまうけせんとて、

さかなをとりに、をとこのもとへいひやりける。

みなそこ

水底の人

水の上

水の上

後撰集恋

女のあるじにいひわたりまうでこしかばあるじまうけとりあつめてあるじ

○昔、をとこ、ねんごろにいひかよひけるを、女、簾好のうちにありけるを、

といひやりける。

きくらん

聞くらん

女、返し

あるじまうけ

あるじまうけ

○むかし、年ごろおとづれざりける女、こゝろうつりにけるを、
いかゞとおもひけるあるきつかひのもとへいひやりける。
他國言

あるところへまかりけれど、もとの人、いとよきさまにて出きて、
あくるせるぶしのよ夜ありけるを、
よいひきまして、おこせたりける。男、これをかゝいとやさしがりて、
いとゝのほのかにいづちかなる。
何

こゝろうつりにけるかなとよみける。
答

やまとことばにてよみける。
女

むかしの人、みやこをいでゝ、あづまのかたにいきけり。
あるいせのくにまでいきけるに、
國

みやこのあるじとおぼしき人、
主

むかしの人、みやこをいでゝ、あづまのかたにいきけり。
あるいせのくにまでいきけるに、
國

みやこのあるじとおぼしき人、
主

いづくにかありけむ、
何處

○むかし、男ありけり。
堀

えてしがなとこゝろにおもひけり。
尼真

男、みやこにすみわびてあづまにくだりて、
將

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

いとよきさまなる女、
女

和名抄　江浦草　豆久毛

中将にあはせてしがなと思ふ心あり。狩しありき
けるにいき（往）あひて。道にて馬の口をとりて。かう（斯）
〳〵なむ思ふといひければ。あはれがりてきて（来）ね
にけり。さて後をとこ見えざりければ。女男の家に
いきてかいまみけるを。男ほのかに見て

百とせにひとゝせたらぬつくもがみ
我をこふらしおもかげに見ゆ

とて出たつけしきを見て。うばら（荊）から
たち（枳）にかゝりて。家にきてうちふせり。男かの女のせしやうに。
しのびてたてりて見れば。女なげきてぬ（寝）とて

さ（狭）むしろに衣かたしきこよひもや
恋しき人にあはでのみねん

とよみけるを。男あはれとおもひて。其夜はねにけり。
世の中の例として。思ふをばおもひ。思はぬをば思はぬ
ものを。この人は思ふをも。思はぬをも。けぢめ（分）見せぬ
心なんありける

○むかし男女みそか（密）にかたらふわざもせざりければ。いづく
なりけんあやしさによめる

吹風にわが身をなさば玉すだれ
ひま（間）もとめつゝいるべきものを

万葉旋頭哥　玉垂小簾之寸鶏吉仁入通来根足乳根之母我問者風跡将申

禁秘抄聽色
大臣女或女孫

源氏をとゝの
ゐてうゑの御
まもりにまゐる
しかるべきあり
かたのかたがた

ゐ〜

こゝろかはるものとはあらじとは思へども

くものゐちぢにひまもとむべき

○むかしをとこ有けり。女のいとはしたなくもあらぬを。大御息所
あらはさじとおもへど。在原なりける男。
こゝろをかけてゐけり。殿上にのぼりける
ほどに。女はいとあらまほしくなん。男。
女にはかたらはんとおもへど。男。女
にはかたらはれずなりにけり。女のあるじ
なりける人。聞きてむくいけるなりけり。
せちにいひ侍りけれど

かりそめにものいひてのち。侍りけるを
あるじ。曹子下
といひてにげ。なりけり。例のひとにげしたる。
人のこゝろをもとめてにげ。なりけれど。女おもひ
ゐてにけるを。いまだ何のすきごとをもしてい
なかりけれど。なほ人きてとゝのへつゝ。翌朝
殿司
このもしげなるさまにもてなしてゐるを。
履
ゐもはぎもあらぬ。こゝろにくしとおもへど。
をとこ。よるはゐなかれば。ものあるとこゝろ
をしつゝ。ゐなかれば。ものはのほどなれば。
往
ものとていきけれど。心やぶれすなりにけり。

三代實録天皇風儀甚美端嚴如神性寛明仁恕温和慈順好[illegible]

神ほとけにも申けれど。いや(弥)まさりにのみ覚えつゝ。猶
わりなく恋しうのみおぼえければ。おんやうじ(陰陽師)かん
なぎ(巫)よびて。こひせじといふはらへ(祓)の具(具)してなんいき
ける。はらへけるまゝに。いとゞかなしき事かずまさ
りて。ありしよりけ(殊)に恋しくのみおぼえければ

恋せじとみたらし河にせしみそぎ
神はうけずも成にけるかな

といひてなんい(去)にけり
此みかど(清和)は。かほかたち(化イ)よくおはしまして。仏の御名を御
こゝろにいれて。御こゑはいとたうとくて申給ふを
きゝて。女はいたうなきけり。かゝる君につかうまつらで
すくせ(宿世)つたなくかなしき事。此男にほだ(絆)されて
とてなんなきける。かゝる程にみかどきこしめし
つけて。此男をばなが(流)しつかはしてければ。此女の
いとこのみやす所(座)。女をばまかで(退)させて。くらにこめて
しをりたまうければ。くらにこもりてなく

海士のかる藻にすむ虫の我からと
ねをこそなかめ世をばうらみじ

となきをれば。此男は人の国より夜ごとにきつゝ
ふえをいとおもしろくふきて。こゑはをかしうて

古今
世の中にいはゞ
なしぬ山ほんへ
りしんにたふ
人こそ[illegible]
あり[illegible]

あちらの物語
此歌のかくに
こめてあるを
ふかく志を
こゝろしてよ
とぞ

てぞ　ゑひにける。　ゑひ　酔

ゆぐ　ゆく　ゆ　行

あるとき　あるとき　あ　有

あしろ　あしろ　あ　足

元慶四年十三
四日前年三十が
陳田山納言が

あしでなんあるらん

いろとも　いろ　い　色

あるものとも　あるもの　あ　有

とおもひ　おもひ　お　思

つ。人の　つ　つ　他

いくもつよ　いくもつよ　い　斯

ん海　ん　ん　清和

氷の　氷　こ　氷

尾乃山時　尾　お　尾

みの　み　み　実

○むかし男。津の　津　つ　知

ひきて。　ひ　ひ　引

ふぐもの　ふぐ　ふ　河内

すまじ　すまじ　す　思

ゑの浦　ゑ　え　共

なやの　なや　な　道

○むかし　む　む　道

和泉の　和　わ　河内

いこま乃山　い　い　河内

やまず。あしたよりくもりて。ひるはれたり。雪いと
しろう木のすゑにふりたり。それを見て。かのゆく
人の中にたゞひとりよみける（隠）
昨日今日雲のたちまひかくろふは
花のはやしをうしとなりけり
○むかしをとこ。いづみの国へいきけり。住吉のこほり。住吉
の里。住吉のはまをゆくに。いとおもしろければ
おりゐつゝゆく。ある人。住吉の浜とよめといふ
雁なきて菊の花さく秋はあれど
春のうみべにすみよしの浜
とよめりければ。みな人々よまずなりにけり
○むかし男ありけり。その男。伊勢の国に狩（狩）の使にいき
けるに。かの伊勢の斎宮なりける人のおや。常のつかひよりは
此人よくいたはれといひやれりければ。おやの事なりければ
いとねむごろにいたはりけり。朝には狩に出したてゝ
やり。夕さりはかへりつゝそこにこ（来）させけり。かくてねむ
ごろにいたつきけり。二日といふ夜。男われてあはんといふ。
女もはた。いとあはじとも思へらず。されど人めしげ
ければ。あはず。つかひざね（正使）とある人なれば。とほくも
やどさず。女のねやちかくありければ。女人をしづめて。

西行 山里ハ人こさせじとおもハねどとはるゝことぞうとくなりゆく

主神 日本紀 カミヅカサト訓

大和物語 [illegible]

子一刻ばかりに。男のもとへきたりけり。男はたねら
れざりければ。とのかたを見出してふせるに。月のおぼろ
なるに。ちいさきわらはをさきにたてゝ人たてり。男いと
うれしくて。わがぬる所にゐて入りて。子ひとつ
よりうしみつまであるに。まだなにごともかたらはぬ
にかへりにけり。男いとかなしくて。ねずなりにけり。つとめて
いぶかしけれど。わが人をやるべきにしあらねば。いと
心もとなくて待をれば。明はなれてしばしあるに。
女のもとより詞はなくて

君やこし我や行きけんおもほえず

夢かうつゝかねてかさめてか

をとこいといたうなきてよめる

かきくらす心のやみにまどひにき

夢うつゝとはこよひさだめよ

と詠てやりてかりにいでぬ。野にありけれど心はそら
にて。こよひだに人しづめて。いととくあはんとおもふに。
国の守。いつきの宮のかみかけたる。かりの使ありときゝ
て。夜ひとよ酒のみしければ。もはらあひごともえ
せで。あけばおはりの国へたちなんとすれば。男も
人しれずちのなみだをながせど。えあはず。夜やうやく

酒臺　初名志利佐良

かちんのうらなどなまぬるあんで
とうきてうるおうもの。きちんいれたん
うるうるうる。ゆうまとうきたく

又あるはの実をえんかの
そのあんで尾張の国にうえるうる。いつきのうる。
水尾の清明。文徳天皇の御ものを惟喬のおうこと
いりうる

○いつきのうるいうるうるうるうるうるうるうるうるうる

伊勢

古今集
[illegible]

万葉十一
破神之伊垣
可越今者吾
名之惜無

うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる

○いつきのうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる

好

禁

酒壺堂和名志利佐良

かちんのうつわものを　かたちのまさりてあんで
とうきてうつわものを　まちびとのうつわものに　いれたる
うつわものあり　ものとうきたるく
又あるはの　実をうえれば　菓
うえあんで　尾張の国　うえるなり　いつきのふる
水尾の清和　文徳天皇の御　惟喬親王　惟喬のこと
いりうつし

○むかし男　ものつかひ　なりきるなり　伊勢　大和物語

古今集
ものとのみ　ハ　清げ
さきてぬ　ぬ
人　ちる　ものつかひ
まつ　つ

万葉十一　千ハ　葉
破神之　伊垣
可越　今者　吾
名之惜無

うつわものあり　ものつかひ　なりきるなり　大和物語

○むかし男　いせの郡　ある侵　国の侵　すてゐ　いれ　うえ
ものつかひ　好　なりきる　ものつかひ　なりきる　ものつかひ　なりきる
ちはやふる　神のいがきも　こえぬべし
おほきみの　こゝろ　ほかに
をしてこゝろ
恋しくは　きてもみよ　ちはやふる　神のいさむる　禁　なかくは

○昔ゝ[illegible]侍りのあるやうなる女又えあらでさうのあるいくさていらでうつくしうれで女

大ぶのわらつくもあるわらし

うつくしてのくもあり波うな

○むつ[illegible]其所[illegible]ありしき身で。せうそこ消息だにふ

絶くもあるなのあるとおりいろ

あるもうんてもよもそこれな月のうられ

うつくのごとき[illegible]ぶあるる

○むつ男。女といあく恨て

[illegible]

万葉四目二破見而手二破不所取月内之枳如妹乎奈何責

万葉十一石根蹈重成山雖不有

アハヌニハヒヒタツヒ不相日數恋

ワタルカモ度鴨

あるる自分ほうく[illegible]

○むつ男。りものあるなていきてあるといえれだ。そんな

大ぶのそ[illegible]生

[illegible]和

[illegible]

[illegible]

神なれてあ[illegible]

[illegible]

女う絶

[illegible]

えほしいえあるこちらしもあるうん

又ゆくこ

ゆくすぎぬるつゆしほる世の人もん

つきゆかち神のしばしばの

世よあつ車ときき女ようん

○むかし二条の后のまだ東宮の御息所とかたる時。

氏神にまうでゝのかへるさ近衛づかさにまうしかる

おきなべくのろくにかるにいでゝ御車もとめて

まうでゝまうかる

たかくやとかの山ゆきあふこと

東宮三代實録貞明親王貞観十三立皇太子是陽成院也

崇子右大臣従二位良相女

源氏鈴虫巻ニ

御ちくらしてと

ゆるしてそ文ろ

ゆほしうのちき

常行右大臣良相嫡男

御代の車もおりいあるゝ人

やうて心よりうるまりしかんいでゝ人ゝ

○むかし。田村の御ゝ代ゝ文德ゝ御ゝ子ゝ惟ゝ喬ゝ親ゝ王ゝ。昔時の

女御ゝ崇ゝ子ゝ在ゝ。ゝ

安祥寺山科ゝよりてゝ捧ゝ物ゝ。

ゝ千ゝ捧ゝ若ゝ干ゝ

堂

講

ほどに。歌よむ人々をめしあつめて。けふのみわざを題にし
て。春の心ばへある歌たてまつらせ給ふ。右の馬のかみなりける
おきな。目はたがひながらよみける
山のみなうつりてけふにあふ事は春
のわかれをとふとなるべし
とよみたりけるを。今見ればよくもあらざりけり。そのかみは
これやまさりけん。あはれがりけり

○むかしたかきこと申す女御おはしましけり。うせ給ひて
なゝ七日のみわざ安祥寺にてしけり。右大将藤原
の常行といふ人いまそかりけり。そのみわざにまうでたまひて

禅師のみこ　仁明第四人康親王　三代實録貞観元年五月入道法名法性

源氏花のえん[illegible]

三代實録貞観八年三月廿三日鸞輿幸右大臣良相西京亭

かへさに山しなの禅師のみこ(親王)おはします。その山
しなの宮に。滝おとし水はしらせなどしておもしろく
つくられたるにまうで給うて。年ごろよそにはつか
うまつれど。ちかくはいまだつかうまつらず。こよひはこゝ
にさぶらはんと申し給ふ。みこよろこび給うて。夜の
おまし(御座)のまうけせさせ給ふ。さるにかの大将。いでゝたば
かり給ふやう。宮づかへのはじめに。たゞなほやはある
べき。三条のおほみゆき(行幸)せし時。紀の国の千里の浜に
ありける。いとおもしろき石たてまつれりき。おほみゆきのちたて
まつれりしかば。ある人のみざうしのまへのみぞ(溝)にすゑたりし

たてまつれりしかど。大将のこのみ給ふ君なりと聞て。たてまつらんと
の給ひて。みずゐじん（御随身）とねり（舎人）して。とりにつかはす。いくばく
もなくてもてきぬ（持来）。この石きゝしよりは見るはまされり。これを
たゞ（徒）にたてまつらばすゞろなるべしとて。人々に
歌よませ給ふ。右の馬のかみなりける人のをなむ。あをき
こけをきざみて。まきゑのかたに。この歌をつけてたて
まつりける

あかねどもいはにぞかふるいろ見えぬ
心を見せんよしのなければ
となんよめりける

三代實録曰貞觀十八年三月十八日辛卯皇子貞數爲親王二歳母更衣參議太宰帥從三位在原朝臣行平女也

○むかし。氏の中にみこうまれ給へりけり。御おほぢ（祖父）がたなりける翁のよめる

わが門にちひろ（竹真）あるかげをうゑつれば
夏冬たれかかくれざるべき

これはさだかずのみこ。時の人中将の子となんいひける。あにの中納言行平のむすめのはらなり。

○昔。おとろへたる家に。藤の花うゑたる人ありけり。やよひのつごもりに。其日雨そほふるに。人のもとへをりてたてまつらす（令奉）とてよめる

ぬれつゝぞしひておりつる年のうちに

源融公嵯峨第十二皇子母正四位下大原全子貞観十四年八月任左大臣仁和三年從一位寛平五年薨車同七年八月薨七十三

源氏物語の中の男の名加多井

和名抄に見

惟喬親王文德第一皇子母右衛督紀名虎女兼和二年誕生貞観十四年出家貞平九年二月廿日薨云々号小野宮又平家物語二水原皇子ト云リ

○むかしたのおほいまうちぎみいまそかりけり（大臣）
のちにはさきのさきのさきのさいしやうにまでなりたまへりけり。神代月の比ごとにかの家の前なる
ひいらぎなりけるみのちごちよとあるとりみこ
あちこちにまかりて。狩をしたまふに。あるじ
の家にいたりていろどりたるきくをほめ
たまふ。あるじかしこまりてかくなん。
ひとりきて人まつときはのかげをよりて
ぬれどもとりあへずぬれにけり（和）

ぬれにけるかなとよみたるを。あるじ
の中より。はづかしまでもあらぬ。
かのちごのもとにいとめでたきよしの
きよらなるとよみたるを。
○昔。これかれ。ものがたりしてゐたりけり。山崎のあ
なたに。水無瀬といふ所なりけり。業平の惟喬親
ざうのもとに。その宮にまかりかよひけるに。その時は
るのつとめてまかりけり。

ぬれにけるかなとよみたるを。あるじ
の中より。はづかしまでもあらぬ。
かのちごのもとにいとめでたきよしの
きよらなるとよみたるを。
○昔。これかれ。ものがたりしてゐたりけり。山崎のあ
なたに。水無瀬といふ所なりけり。業平の惟喬親
ざうのもとに。その宮にまかりかよひけるに。その時は
るのつとめてまかりけり。

時世にて久しくなりよろしき人の名をそれよりう
狩
ちを拔もどろよもせでほとのみうつ。やはとかな
而已　皮袋
よりまうきうをとうとうとるうこ。もののるぎうの家。
交　裏名ナシ
院
なんの桃頭ことよりうし。さ来のりしよりめて桃と
桃頭
れてかうはでうこるのしるを落ることよりこうるの
うこるうるうるの人のよ先うる
世中よりめえて桃のるうう勢で
うるのうこうちのぎうこ虫
うるんようこうこ。又人乃うこ
可愛
うんぎうこいこぎ桃ちめでめ育れ

うき世よりのひきうるぐ
こうこうの赤のりこうこうこうこうよ。四られよるう勢。
四位ちるる人ぶこうこせて地ちよ出きあうひはるを
のこうてんこうてよきこうこうとまと先せしくよ。天の川
酒　日本紀
こうこうこうよいありめみこに馬のうこちぐうこうきはる
いるみこのぶいるかこ地をううて。天の川乃ぐこう
よいあうと鄭すて。所ぶてこうぐきちせこのの
織女　万タナバタツメ
うれぐうの馬乃うこうようこうこうする
かうこうこうたるぐこづよ右うこ蒙
あまのぐうこうよ知ちきようう

みこうこをうつてこそんじがほにてゐてえいはぬ。
紙のありつるほどをまつうちにはまつそれが返
ひとせ　なきまして　来まして　待乳母
ゐるとて人をあつしらせる
ゐりてゐるいとせはいなぬ夜ふかうにはでさけのこ
ものごとしてあるじはこゝをいて入ぬる後。
十一日月をかくれるんとそれだのうまのうそ
よ見る
あるかいまはぐらを月のかくるこの
山はるかにていれぬるあくるん

みこうこをうつてきの有はる
かりるべて家をたひらよりかくん　平
山のこなたに月をいでぬ
○ひとり水をながめるひはひ。惟喬のみこ例のうし
よりて海ちかくもようまつをなり義はるまのれう。
月ごろへてゐようすぐるはかりして。そこいるん　疾
とおりつよおほくきはひろ　禄
まくりひるあつこゝりてゐるうて
松をてまひきもひとぶ車をもて
あきの夜とぶたのまれるよ

よみける時は弥生のつごもりなりけりみこおほとの
ごもらであかし給うてけりかくしつゝまうでつかう
まつりけるを思ひのほかに御ぐし(見前)おろし給うてけり。
むつきにおがみたてまつらんとて小野(山城)にまうでたるに比叡
の山のふもとなれば雪いとたかし。しゐて御むろにまう
でゝおがみたてまつるにつれ〴〵といとものがなしくておはし
ましければやゝひさしくさぶらひていにしへの事など
おもひいできこえけりさてもさぶらひてしがなとおもへど。
公事どもありければえさぶらはで夕ぐれ
にかへるとて

わすれては夢かとぞおもふおもひきや
雪ふみわけて君を見んとは
とてなんなく〳〵きにける

○むかし男ありけり。身はいやしながら母なん宮なりける。
その母長岡といふ所に住給ひけり。子は京に宮づかへ
しければまうづとしけれど。しば〳〵(詣)えまうでず。ひと
つ子(アイ)にさへありければいとかなしうし給ひけり。さる
に十二月ばかりにとみ(頓)の事とて御文あり。おどろきて
見ればうたあり

おいぬればさらぬ(不避)別のありといへば

清少納言云
又業平の母のい
よ〳〵見まくと
のたまへるいみじう
あはれにをかし
ひきあけて見たり
けんこそおもひ
やらるれ

欲
甚
世のなかにたえてさくらのなかりせば
春の心はのどけからまし

惟喬
宮
○むかし男ありけり。水無月のつごもりがた、ものいとあつかりけるに、
思ひ出でて、人のもとにまかりけり。
日
離
ひさしくなりにければ、
暑
さのあまりにかくなりにけるにや、
衣
ぎてぞ、あるべき事。

○むかし、いとやむごとなき男、あり。
酒
くるあり。
果
ごろ、女の所へ、
俗
禅師
正月
終日
如
醉
よく
真
真
真

万三　然之海人者軍布刈塩焼無暇髪梳之小櫛取毛不見久爾

おんなもかいなんなくてやまろうとの
今はでよとそれなくなくせもあらじ
かのがたりくにのかみのまこと
そこやうなるなりけりおとこを女ぞあいそれもまづこよ
るん出よとのたまへ
○むかしはのまうちぎみのきたりあるやの里よりまろうとえて
いきてをみなりけりはつかあり
ひとのをとこのもとのはやきことはるく無
はるごのをとこもいでこよりも
はやくこるそこの里どうしるこてくらんをとこ乃

三代実録太宰府例貢小桙子

難
ちごとはいりいるけれおとこをはあづくれんそをと役えて。衛府
仇
そけどもあるはきようけれおとこのつこもをあのつこべろ。兄
督
をあるのまくのあるのうあるあるびあるきていさけるのの
率
くうあるいて布刈の海のかうりあるのぼんとしてのぼりて
異
あるそのはしのあるこうろ。高真長さ二寸丈のあるあ丈
ごうりるる石のおりてをもきあるいくをくをんやうを
然
あんあるるのあるはしのみをくうこのおけきにてさし
圓座和名
出るるあるそのいはくをはりるるあるこ小ハぜうくど
小桙子
栗
くりはいはきにてこぼれおりそるる人をるるはしの
ををはあるこのをくをれるくを先すし

我世をはけふかあすかとまつかひ(間)のなみ
たのたきといつれたかゝらん
あるし次によむ
ぬき(貫)みたる(乱)人こそあるらししら玉の
まなくもちるか袖のせはきに
とよめりけれはかたへ(傍)の人わらふ事にや(哉)ありけん此歌にめて(感)ゝやみ
にけりかへりくる道とをくてうせにし宮内卿もちよしか家の前く(来)るに
日くれぬやとりのかたをみやれはあまのいさり(漁)火おほくみゆるにかのあるし
をとこよむ
はるゝ夜のほしか河辺のほたるかも
我すむかたのあまのたく火か

とよみて家にかへりきぬその夜南の風吹て浪
いとたかしつとめて(翌朝)其家のめのこ(女児)ともいてゝうき(浮)
みる(海松)の浪によせられたるひろひて(を真)いへのうち
にもてきぬ女かた(の真)よりそのみるをたかつき(高坏)にもりて
かしは(柏)をおほひ(覆)ていたしたるかしはにかけり
わたつみのかさし(挿頭)にさすといはふ(齋)もゝ
君かためにはをしまさりけり
ゐなかの人の哥にてはあまれりやたらすや

○昔いとわかきにはあらぬこれかれ友たちともあつ
まりて月を見てそれか中にひとり

おろかなる人を月をもめでず花をもめでず心乃
つれなく人のおいとなるもの
○むつましかりぬべき人を我ゆへ世をうしとおもふ人
おりしいふ宜て年へ宜る
人をまことのみちにしたがはしめんとおもふ
いづまの神よ願はくは名あらはせん
○むつましかりしき人といふてとかりしかとも宜んだ。
物隔
名をあらはしい宜んぢやとてものゝへだてにて
いつりなるとかぎりなくまことにてとと
なれどおりしろうろう桜よつ宜て

桜花ちりかひくもるまあつ〜紛
斯
あるものゝごとあるのよれてと
難　事
とうとうとうぐへもあるべし
○むつまじかりしかとも宜ぬ男やもいつぐりなるよ
をとこなどもまのつぎまものゝよれ日乃
ゆくへしらずなりにしを
消息
○黄金をつきてゆまでゆまで女よせうそこをあつう
えせでよあるべし
棚無
あつべくたるべし小永いくそあるべ
幾十度
ゆきうへうんきるべくなるこ
無

○昔とてこそ[illegible]いやしくてぶとうするき人とおもい
うまうちうちそこたのしぬべきさはやみ
うん物[illegible]ておりしいもきてちいもりをとびてあり
おほなくちいちとでるぞへ[illegible]
あうきいやしきうちうと
むかしもうまそせのことりもあうん
○昔男ありけりいづみうんその男とあはせ成よりり。
後のことあうんどるの中ありけりこはうま
こてあるまでうきくのいかうせうなぐこて絵
うしくうりうんでかきよやうとうとそれ男のもり

ちとてひとをこのかうをぢうなかの男いてつく。
おのぐきこめる車いだそ男でけうるぐこそり
とうへぐるほくとでうえうあるうんを
けうこそうじて語てやあうるうきそ秋日
なんあうる
秋の夜そ長うとけるあるんや
うとうして芳やよ立真ん
や物んよやうる女うん
ぐ乃妹ひうのうにむとちや
りみぐりとそそちまこ

○昔二条の后に仕ふる男ありけり。女のつれなくて、
つれなくてよりこそいとかなしけれ。いとで
物ごとにいとこそいとこそ。
はたらくまじきものかな。
思ひてあるにあいなくもあるかな。
いこまやまを越えぬるかな。
つぶさに男とともにてよ
ものいふこそあいなけれ
○むかし男ありけり。女とかくして年月を経けり。
おのづからあだなりけるやうにぞ思ひける

後拾遺夏
たちかへりなにしおはばつまつちの
よ秋と見ゆるなりけり
ものの陰かな

衣をかりいとうそのうちは
五月のもちづきのうちは
えだ。女方よりさひとつめこひ出きてよりて。
せるぞ。そこに何の心もなし。
いでありけるをいとあつしとて。
ちんとよりてあるべきといくとて。
ほいよりこうとより
ぐちでできるよりたりえだ。女のせうと儀よ
むかしよりきりぎしだ。
ひろとせて。
秋ちかくていとしるべきものかな

古事記踏傾其心而天命逆ノ矣於吉柴垣形成而隱也

ホのそこふかくえまとあり。
こちらきて。彼所こゝろ人かこゝにをもとやれこて
いぬ往ちてゆくて後はのよけまでをこゝとやゆ
あるんにつくてやあんぱいす不もをこゝど。彼男ハ
なまのちるまとうらてるんのうひとろ明るゆく天通
つるきこゝ人のめうの事ハ負ふのすやあんぱかて究
ぬるのすやあんぱこゝをこゝ人をこゝとるる
○むう堀河のおういほうちぎこゝ古大臣基經昭宣公在
うう。ほ十乃於。九条の家うてせこれる日ぱ
うりるかき那

梅ぐるちういうまおいらくかん交
うんといふるをほぐふうる
○昔おかきかほいほうちぎこゝきこゝあるおこうう。太政大臣長房忠仁公
ほうこほうる男。長月ぐうよう先のつくう枝。
きじとつうてなるこて
秋の夕ぐ考ぐたあすこるる花を
ときしもとうあすでこる
と詠てありたるこれぐいとうこくおうぐう
ほいて。使ほうくぐうこう
○むう古こんのる梅のひとうの日ぱむういすこて

和名抄幌幔　俗云車簾車帷也

和名抄萱草　和須礼久佐

同抄垣衣　之乃布久佐

きりかける車よりはなのかげのしたにおりたちてうゑまつりけるを
見こえけるまでゐ中なるうりかる男の清てやりける
みどりなるあをやぎのいとをあさみとりにそめかけるかな
ちやるゝ〜ちやるゝやるがめくらにうん
うゑし
ちやちやゝなにかうあやるゝときていとん
おりいのこしてちるぐるうるまし
めちやしくあれてちやうよう祭
○むかし男後深殿のてちまとちやうれである
やんごとなき人のかつぐまりちやちやゝあと
やうなりていとさをかくれでかくれて
ちやうまちあうるゆゑとをみるゝ先ぜ
是　こちちのぐるう後もたのまん
○むかしたゝ米のうちうる在ちゝの行ひやう
よあうりうりそのへ乃家よりきはあうときて
殿上　うゝよあうりうるたゝ中無岩原の海さちうゝをを
上客　饗應　るんはらうゝぐざまるまてそのの日ちあるぐはうゝ
しあうりうるなちうある人まてうんん瓶よ花をさちう。
奇異　甚花の中よあやしき花の花あうりう。花の
ちうるひ三人六すぐうりうるんちうるそれを知まて

藤原良近　昌泰不比等末孫貞観十六年轉左中辨三代實録九十有傳

よむ。よくこそてぐしよ。あるべのちうるる。あるべ（兄弟）（饗）
ものをきて来りるべ。ぐしてよをとる。もし
より旅のるをちぐばりれどをいれど。ちい（辞）
てよませるまぐうるん
咲花のちうるるひやかし（多）
ありしよをさる家のをうる
紅ぐうるもよ世をいれど。忠仁公（栄）
くるのさりにみをうりて。家氏のてよをうる（華）（在）
ひちりいてるるんいる。うるへうらぐ
ちりようる

○昔男ありけり。京をよりをざりれど。世中をとい（貴）
ちりあるとる聚。あてる世乃あまよりて。世る
とりいうひ（倦）て。京もあるぐばるる山里
よ住ありもやとぐ（親族）ちりれど待てやりる
そひくてちのるあるれや
世のき米でよりるるて
とるんいやとる。米るのうやなり
○ひりをとて有りいとをるよぐちりすてぐ（實）（要）
ちり心ちりる。原（仁明）るのみぐよるんををりる。
うちあやりやえてうんみてちのうひる

史記項羽本紀曰 項籍顧師古曰 眴音舜動目而使之

後拾遺 うとがてにて おもひかねたる人は

うるはしきかたちの
のあらはれたる
もゆるかをり
ちとくはせん

うるはしくあいきやうさて
花のかをりをとこなつかしほどろもちで
いなこそるもしらぬ恋をする
やるん清てやりるぽろ命のきるぐらよ
○むかしをとこありける車にてあほるるろ人をそそり。
そらとやつしたまで。あややしうりんぐ茂の
ほろうえよおやりるると。男命清てやる
世をそこのあまろ人をみるろまま
ひくそせよそもたのまるくば
乞ハ神ちあのひろえるひる車よかくきこえ

ありそれだんだんてうりはいよろそるん
○むかし男。くてちそるぐ。こいやりたりれぐ。女
白髪をけなでるるくんきえばそて
たまよめくぐよ人をあくぐな
やいろりそれだ。とるあ。ホこそいそれぐ。心ぐ。そ
いやほそりそあり
○むかし男。みそこのせそえそ。ほよほうぐ。
を田のりかそりて
よそやゆる神代もきくぐ。五条の
うそんるりよりくぐるやそそ

藤原敏行従四位下富士麻呂男母紀名虎女貞観九年任内記

○いとあてなる男ありけり。その男、ある人の
と。思ひかけたりける。女、この返りごとは、
なりけるまでは、ものしたりけれど、みこもたちこ
そ。なほ、なほいとこそ。況んや、家なほざり
なるまでは。この男、なる人。案
やとりけり。めでまどひけり。さて、男のよる
ほどに、のぞきて、ほうるるなりけり。
神のごといちてあすをなし
つ。俗の男、女、ものしたりけり。
ほどこそ神ちいつくんけり。

結婚
不幹
感惑

方ちへなるべきことなるべきのほど
やいかばかりなれば、男いといたく泣きて。ものしたりけ
て。文宣
ものしたりけるあるやうなるに、男、女
おこせたりけり。えて、俗の手なりけり。面の様、ぬぐき
にるんなりとて、ものいはる。方ちいとあてなりけるを
嫁にやいたりけれど。例の男、女、ものしたりける
清てやると
遣
ものしたりけるとこそ
方ちとりて、嫁にて、ほうるる
やいたりけれど。みのもなしとなりあへで。

卷
得
幸
難
ホイ

六帖よ
まろ寝ふたり
に袖をぬ
ひ〜まくら
ゝそ〜ふる
ゝ〜ふる

ゝ〜ふるよ
ぬるまてゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

○むかし男。女のこゝろ見てよめる

風ふけば常なみ立つとゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

言種負

○むかし男。女のもとにつかはしける

ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

○むかし男。女のもとにつかはしける

ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

狩衣
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

後撰恋一
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

○むかし男。宮ゝ女ありけり。ゝ〜ふ〜ゝ

ひ〜ゝ〜ふ〜ゝ

魂結

おもひあまり出でにしたまのあるゝん
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

○昔男。ゝんごろなる女の病よるゝ〜ぬよ〜ゝ〜ふ

吊未

ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ
ゝ〜ふ〜ゝ

うるかごとも来どどすぐき

又うるはし

○むかしをとこ紅もいろどりてしもの

さらんを人をれと言るん

○むかしをとこ紅もづらよいきりる女。異

まるりにそれど

そはの海をの姫やくるみ屋といさ

おもしろうよたるびきるろ

○やうの男。鰥やもめ

なぐらぬ家の松よりそうくそ

万葉七之卯乃花乃白水郎之塩焼煙風手疾立者不上山尓軽引

三代實録仁和二年十二月十四日戊午行幸井川野

○むかし仁和光孝のみかど。芹せりのよ行幸しのいろ時。

人をいろ来まよ似ぬ人おいれど。もとつきう

ある来るれど。おうるの鷹大飼ぐいすいろ待

ぶいるる。ぶるるぎ衣の袖よ出る

おきるいろ翁人るるぶ莫咎そうるる

るぶるるたびも鶴

公おりや家の出家よりるる。おのぶよいとも

けまぶ。るるるる人ちきおいるるや

○むかしみらのおすて。男女をみる。男をちいるん

奥の井都嶋 奥の井の名 所或ハ奥の井手 又作

熾 和名於岐比 猛火也

万葉十一 浪間 万葉十一 見り島之 渡る木の久成奴 君尓不相手

とらずとて女いとうるさくてなるに餓死をせんとておきのなべみやこどりといふとうとて酒のはせをあるよりなる

おきのなべ居 やく焼 とうるさきとうるさき

都をほべのとうとうとうとう

○やうに男どもとうとうの国までほどいとうとう京

よりとうとうとうとう

涙ながらとうとうとうとう小鳥の声いちぎ

いちぎとうとうとう

○むかし女のあるじなる男の（真三）記念みとして海の方のあるじとえて

かくこそ見つれなくにつるるかなるくだ

とにたるくはもあるにはあると

○むかし男女のまぐはせ（未）（経）どもおぼえあるべくの所

よばひてあきこえて後あるべくの

をけるにはにはのまはりにはせ（筑）（摩）（疾）

つまこもきくの（鍋）のるべのうどもん

○やうやうとて梅つぼより（凝花舎）ありやなれてべくの（退）

いけるとえて

催馬樂

あをやぎ

糸まきりてう

くいさの

ちふさ

梅の

花えて

菅のうるとぬるとぬるとぬるうるれ

（濡）ぬるうるれ

○舞し

うるいるとのおびぬるとぬるうるれる（否）

そいるとうるとうるうるん

やうとてとて梅の津あやはきるくよ

山城さん井のもとのもとのもとび

あるうるうるうるきるうるう

少いいやれどいるくもせび（答）

○昔男あるうるうる海をよ住るる女びやうてあき

ぐしやかりいんぞるをとよしうり
年をへてそこもり星とおもてるぞ
いとど涙を助うやるりかん

女うあし

郭うるぐうぐしうりて呼をん
狩うりぐしにやく表ハこげん
やまをるるうるめぐぞ感ぬんとちよかるり感なん
○むりをそこぞるうる事とをいるとうとよこの
ようぬ多

おりとていとぞ黙多でよやうるべき

ゐをとい等ぞりだ人ーなうれば
○むーー男ぞづいてうちをるべおばえうし多
ばいよをてうちとをう拾てきてーかど
きのうを姉こちをもし
ばうりば

嗣出

本朝度制畧考　日本尺ノ考

古歌彙　古事記日本書紀ノ歌ヲ載解シカタノ紛レヤスキ樣ナル所ニ譯ヲ付ク

詞藪　源氏狹衣等ノ耳遠キ詞譯ヲ付ク

增補袖珍假名遣

萬葉集類句

裝束色彙　官服ノ色目重ヲ等ヲ委ク記ス

安永五年丙申仲冬

東都書肆　須原屋伊八梓

和本充実
92

四二一